SS基幹探究　探究基礎Ⅱ　国　語②

河合曾良「奥の細道随行日記」

以下の文章は、松尾芭蕉の「奥の細道」の旅に随行した門人・河合曾良の日記である。原文はカタカナ漢字交じり文だが、読みやすいように改めた。

1　音読してみよう。

2　左下の注を参考に、現代語訳しながら、旅の様子を具体化してみよう。

3　文中の地名から、芭蕉たちの足跡を地図上でたどろう。

4　芭蕉らが関心を持った場所は、どんな由来のある土地なのか、調べてみよう。

（元禄二年七月）十三日　市振を立つ。虹立つ。泊にて玉木村、市振より十四五丁有り。中・後の堺、川有り。渡りて越中の方、堺村と云ふ。加賀の番所有り。出手形いるの由。泊に至りて越中の名所少々覚ゆる者有り。入善に至りて馬なし。人雇ひて荷を持たせ、黒部川を越ゆ。雨つづく時は山の方へ廻るべし。橋有り。壱里半の廻り坂有り。昼過ぎ、雨聊（いささ）か降りて晴る。申の下刻、滑河に着き、宿る。暑気甚し。

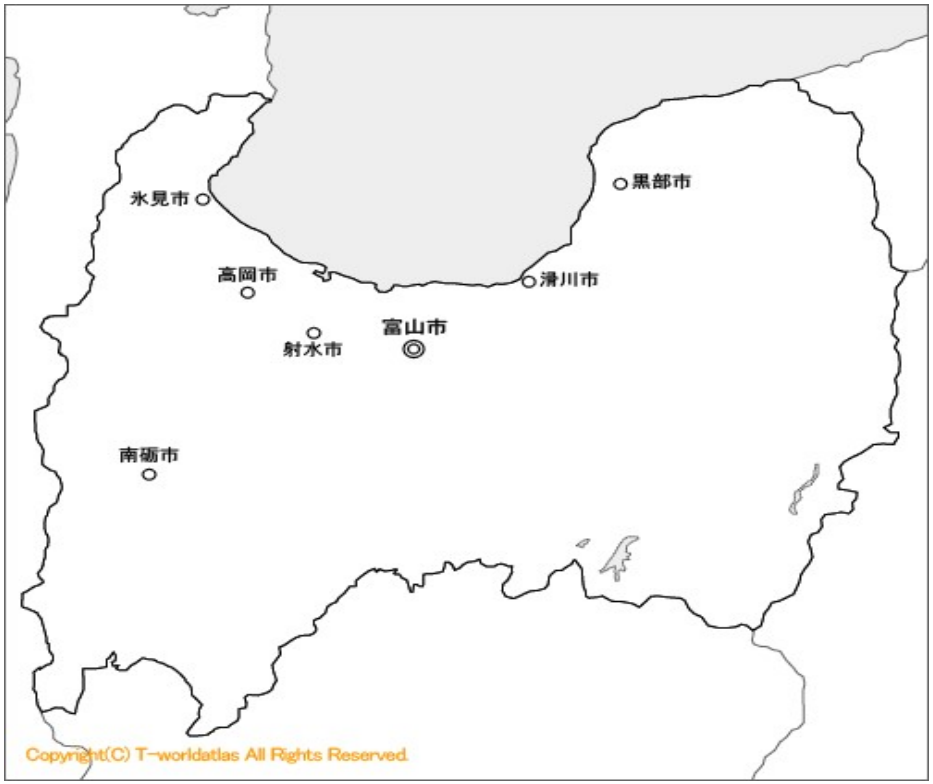
☆太陽暦だといつ頃か。

十四日　快晴。暑さ甚し。富山かからずして（滑川一里程来て、渡りて富山へ別る）、三里、東石瀬野（いはせ）（渡し有り。大川）。四里半、放生津（渡有り。甚だ大川なり。

☆現在の何時ごろか。

半里計り。）氷見へ行かんと欲して、往かず。高岡へ出る。二里也。奈古・二上山・岩瀬野等を見る。高岡に申の上刻着きて、宿す。翁、気色勝れず。暑さ極まりて甚し。少病同然たり。

十五日　快晴。高岡を立つ。埴生八幡（はにゅうはちまん）を拝す。源氏山、卯の花山なり。倶利伽羅を見て、未の中刻、金沢に着く。



☆氷見へ行かんとしたのはなぜか。

☆氷見へ往かなかったのはなぜか。

☆「翁」とは誰のことか。

☆一日の行程はどのくらいか。

《注》

・丁　町。一町は約百九メートル

・中・後の堺　越中と越後の堺

・出手形いるの由　出国の場合に手形が必要だと記してある。

・加賀の番所　加賀藩の境関所。

・橋　宇奈月の愛本橋

・富山かからずして　常願寺川を渡ると、富山への道と海岸道に分かれた

・大川　始めの大川は神通川、後の大川は庄川